

第3章 京都大学植物園遺跡出土の縄文土器底部について

西原 和代

はじめに

本調査区からは、完形の土器の底部を含め、計421点の土器底部破片が出土している〔中村1974〕。2014年からの再整理において、縄文土器底部片はコンテナ2箱分、接合後の状態で83点を確認した。このうち、第I部第3章第1節に記載してあるものを除き、図158～160では底部形態のバリエーションを網羅するよう、76点を掲載し、その他のものについては観察表に記載した（表13）。

以下に遺物の報告および土器底部の外面にみられる底部圧痕について若干の考察を述べ、土器底部からみた本調査区出土の縄文土器を位置づける。

1 底部研究略史

土器の底部外面に、植物素材を組んだ編物の痕跡や木葉、鯨の椎骨等の圧痕が残る例があることは縄文土器研究の黎明期から知られている〔モース1879、杉山1927など〕。こうした敷物圧痕が土器製作具を示すことや、各種圧痕の種類および、圧痕のみられる土器の占める割合は地域と時期で大きく異なることはしばしば指摘されてきた〔荒木1968・1970・1971、上羽1975、松永2008・2015など〕。敷物圧痕の重複やすり消しを観察することで土器自体の製作工程を復原する試みもおこなわれている〔秋田1990・2007〕。

また圧痕のみならず、底部形態の変化から、底部の変化は土器の口縁部・胴部よりも時間的にゆるやかで、広範な地域に土器型式が広まる時期においても、小地域性を維持するという指摘がされている〔幸泉2001・2002〕。

従来、縄文後期から晩期にかけての京都盆地の土器底部については、圧痕がみとめられる割合が少ないこともあって、報告書においても詳細な観察が報告される事例は少なかった。しかし、敷物圧痕が全面に残るものだけでなく、敷物圧痕がすり消されて一部のみを残すもの、かなり薄くではあるが遺存するものがあることを認識し、そうしたかすかな痕跡を観察することは土器の製作技術について検討を加えるために有用である。

2 分類

分析の方法として、断面形態・底径・敷物圧痕の有無と重複の有無を確認した。敷物圧痕については、拓本とレプリカ法を適宜適用し、原体について観察した。

形態による分類 ここではまず、底部を断面の形態から丸底・平底・凹底・高台底に分類した。分類基準は以下のとおりである（図157）。

〔丸底〕 底部から胴部へ丸みを帯びてなだらかに立ち上がり、境界がないもの。

〔平底〕 底部から胴部への立ち上がりの境界が明確で、底部外面が平坦で全体が接地するもの。底部外面中央がわずかに窪む場合、中央部の深さが3mm未満のもの。

〔凹底〕 底部から胴部への立ち上がりの境界が明確で、底部外面が外縁部から中央に向けて窪み、外縁部のみ接地するもの。窪みの深さが3mm以上のもの。断面形態がアーチ状を呈する。

〔高台底〕 底部から胴部への立ち上がりの境界が明確で、底部外面が接地する外縁部と中央部が明瞭に区分できるもの。断面形態は「H」字状もしくは「ハ」字状を呈する。

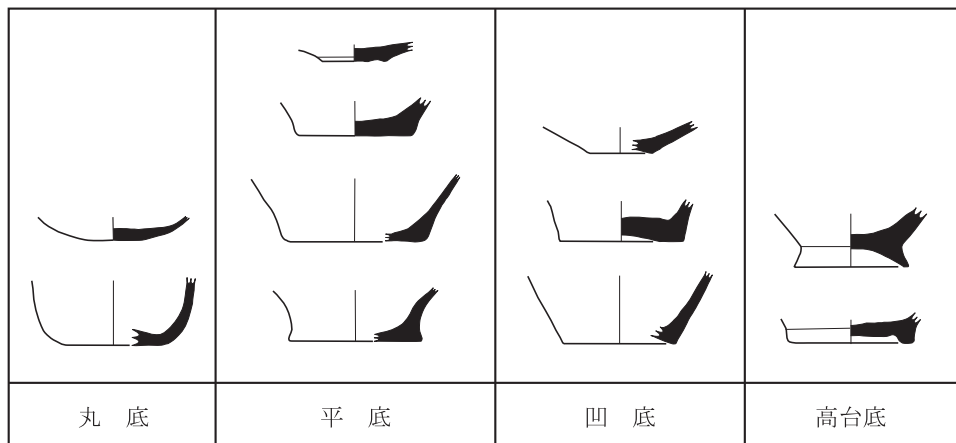


図157 底部形態分類模式図

3 土器底部の様相

対象資料 今回分析の対象としたのは、図で示した76点を含む83点である（図158～160、表13）。1974年の概報では、後期前葉の縄文土器底部について「底部は、平底が主体で、凹み底も若干ある。IV-38（概報の図版番号、筆者注）は高台状に底部をはりつけた

土器底部の様相

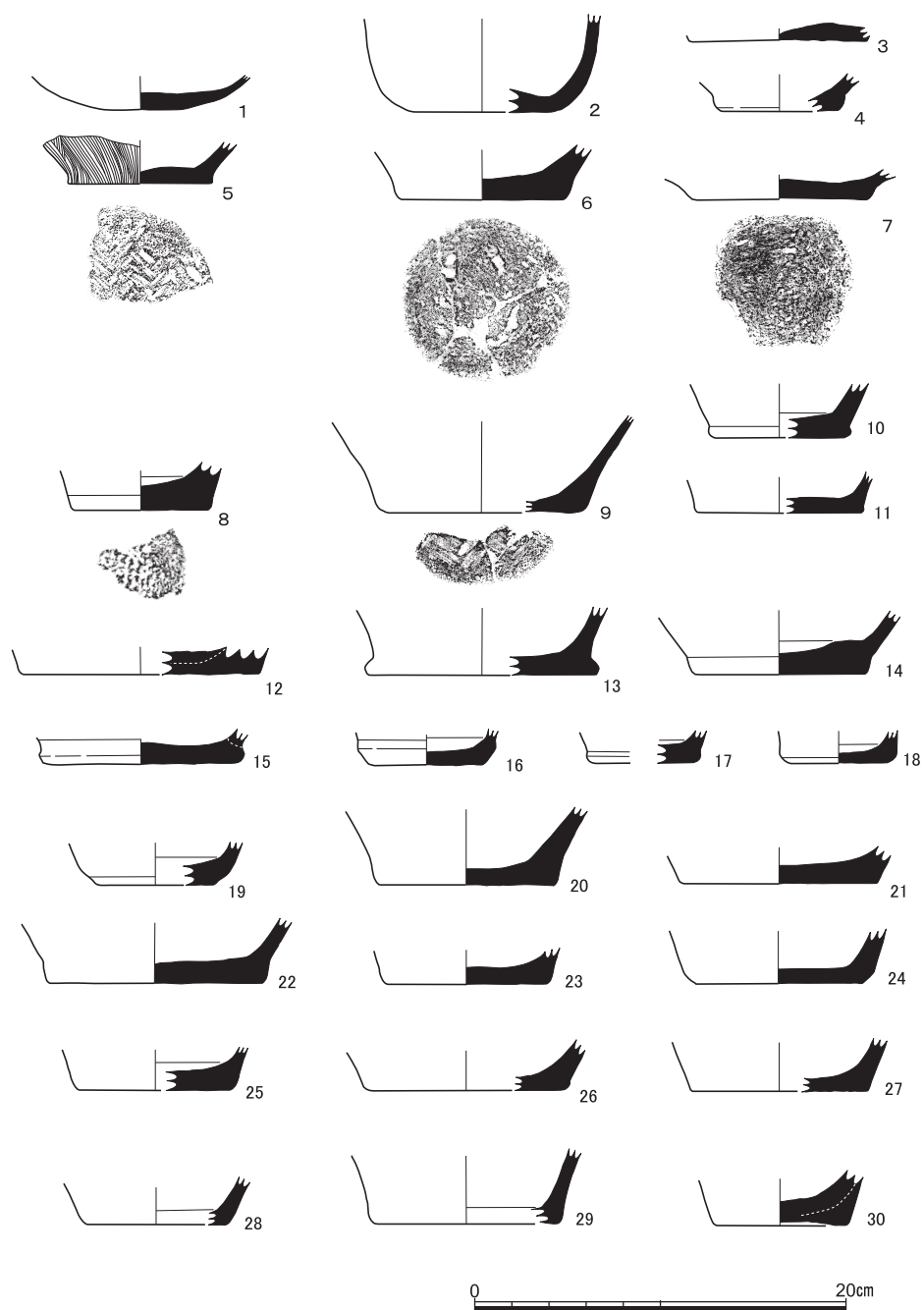


図158 底部(1)

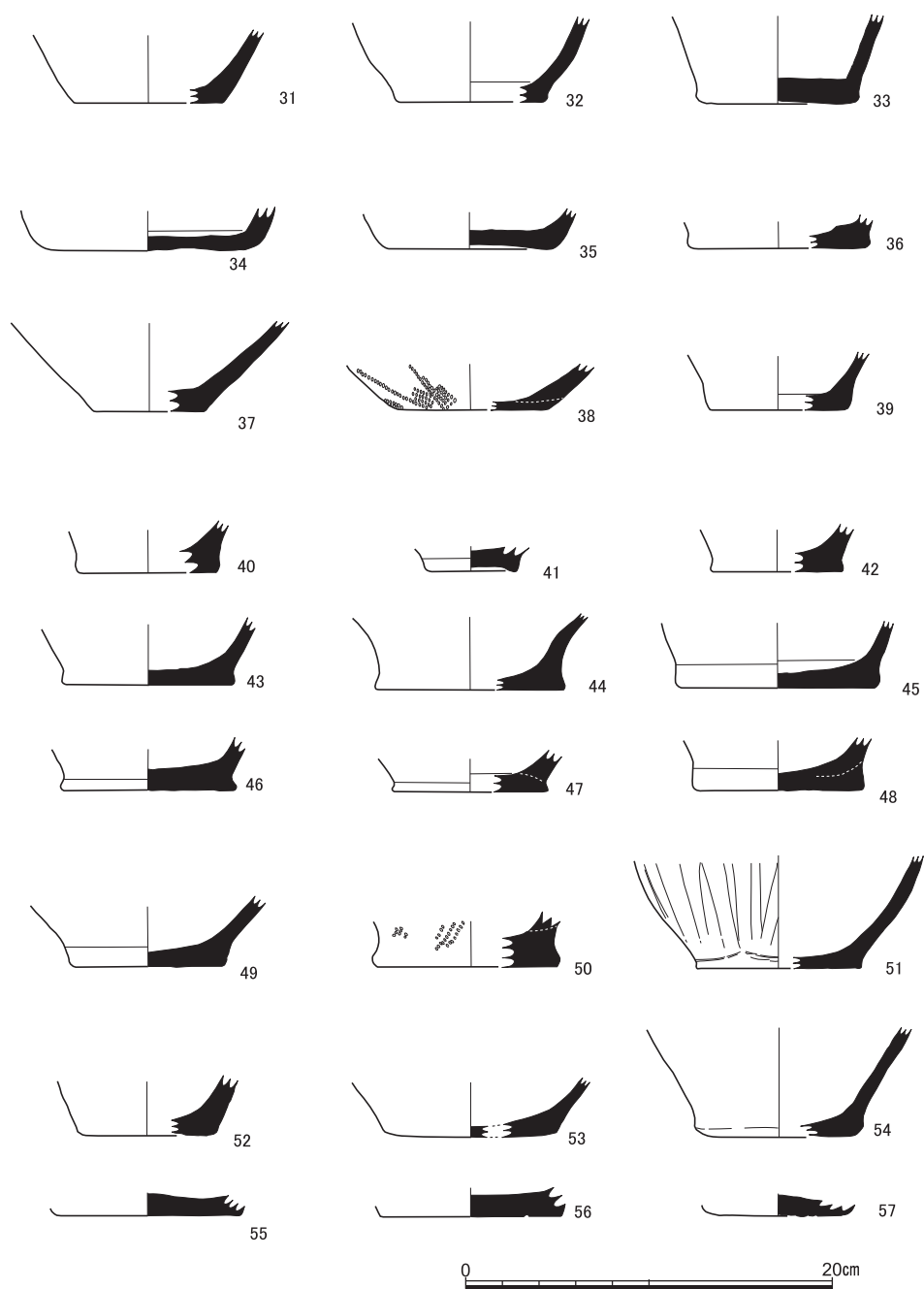


図159 底 部 (2)

土器底部の様相

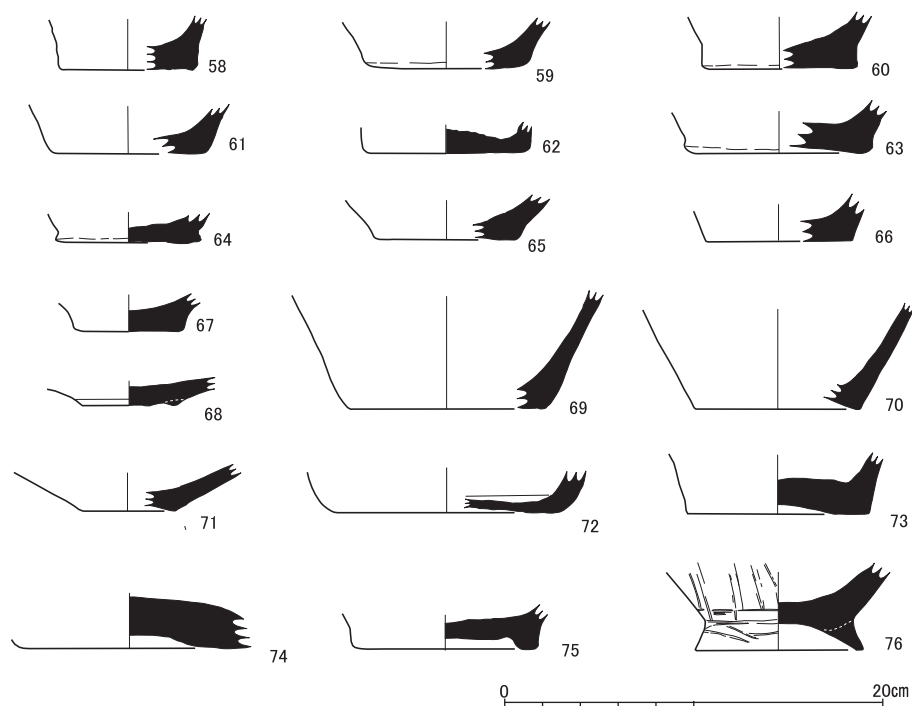


図160 底 部 (3)

底で特殊である。網代底（Ⅳ－36，同上）は比較的多い」と述べられている〔中村1974〕。本遺跡から出土した縄文土器は、底部も含め層位的に縄文土器の年代を決定することはできず、これまでの報告でも型式学的な分類がなされてきた。

形 態 前項で設定した分類にしたがって出土土器の底部をみると、掲載した76点のうち、1・2は丸底である。1は浅鉢，2は鉢の底部と想定される。3～69は平底である。4・5には胴部最下部に細密条痕と呼ばれる刷毛目状の条痕がみられる。70～73は凹底である。凹底の底部外面は全面にナデによる調整がされている。71は浅鉢の底部と想定される。72は鉢の底部か。底部外面には何かを押し付け、内側からけずって薄く成形した痕跡がみられるが、底部外面の圧痕は明瞭でない。74～76は高台底である。底部外面に輪状の粘土を貼り付けて高台状に成形しており凹底とは明確に区別される。

底部を断面形態からみると、京都大学植物園遺跡では丸底3点（3.6%），平底72点（86.7%），凹底5点（6.0%），高台底3点（3.6%）で、平底が主体を占める。

敷物圧痕 京都大学植物園遺跡では、ごくわずかでも敷物圧痕が認められたのは15点を数える。そのうち13点は平底で、丸底・凹底にも各1点ずつ敷物圧痕がみられた。その

表10 敷物圧痕資料一覧

番号	底部 径	底部 形態	立ち上がり 角度	底部外面調整	胴部最下部の調整	編組技法	ヨコ材幅 (mm)	再圧の 有無
1	—	丸	—	敷物圧痕＋ナデ	ナデ	—	1～2	不明
3	—	平	90	敷物圧痕	—	網代編	4	—
4	62	平	—	敷物圧痕	細密条痕	網代編	3～4	—
5	86	平	70→50	敷物圧痕	細密条痕	(2, 2, 1) 網代編	3～4	—
6	89	平	70	敷物圧痕＋ナデ	斜＋横ナデ	(2, 2, 1) 網代編	1～2	＋
7	74	平	45	敷物圧痕	横ナデ	(1, 1, 1) 網代編	1～2	＋
8	76	平	70	敷物圧痕	ナデ	横添え巻き付け編	1～2	—
9	101	平	110→70	敷物圧痕	斜ナデ	(2, 2, 1) 網代編	4	—
10	70	平	60	敷物圧痕＋ナデ	横ナデ	—	2	不明
11	88	平	70	敷物圧痕＋ナデ	横ナデ	—	3～4	不明
12	128	平	75	敷物圧痕	横ナデ	—	1～2	不明
13	122	平	100→70	敷物圧痕＋ケズリ	横＋縦ナデ	(1, 1, 1) 網代編	1～2	＋
14	93	平	75→50	敷物圧痕？＋ナデ	斜＋横ナデ	—	1～2	不明
72	120	凹	60	敷物圧痕	横ナデ	(2, 2, 1) 網代編	4	—
58	78	平	70	敷物圧痕＋ナデ	斜＋横ナデ	—	1～2	不明

すべてが編組製品の圧痕である（表10）。底部全面に明瞭に敷物圧痕が残るものは5～9の5点で、残り10点はすり消されたりしてわずかに一部の組織の痕跡を残すのみである。こうしたかすかな痕跡は、不明瞭な像になりやすく、写真や拓本による提示が難しい。そこで、一部にはシリコンによる型取り（以下、レプリカ法）を実施し、その陽像をしめすこととした。

レプリカ法による観察の利点 レプリカ法による敷物圧痕の分析は、底部の全面に明瞭な編組製品の圧痕をもつ縄文土器底部を対象におこなわれた例がある〔真邊2013・2014〕が、微細な敷物圧痕への適用はまだ例がない⁽¹⁾。真邊によれば、レプリカ法による敷物圧痕の転写の利点は、第一に立体的な原体をそのまま陽像として取り出せることにある。真邊による下宅部遺跡資料の分析は、① 転写したレプリカを切断し、断面形状を分類すること、② 顕微鏡下で観察することで表面組織から原体の特定にかかわるかもしれない特徴をみつけることにまでおよんでいる。

東日本や日本海沿岸地域、南九州のように圧痕が明瞭で原体の厚みもあるものが多い地域では、こうした圧痕の細部は拓本では取りきれないため、レプリカ法は利点が目立つ。しかし、今回の分析にあたって、明瞭な圧痕の残存比率が低い京都盆地周辺の土器底部資料についても、拓本や写真では提示しにくい微細な圧痕の陰影も陽像として提示できることを強調しておきたい。

レプリカ法の作業手順 作業にあたっては、シリコン自体に含まれる油分や、シリコン剥離の際の汚損を防ぐため、土器の胎土や焼成の状態を確認しつつ適用可能な土器をピ

表11 敷物圧痕に適用される方法の比較

	拓本	粘土による型取り	レプリカ法
適応可能な土器の範囲	○	○	△
簡便性	○	◎	△
立体的な原体への適応	×	○	◎
微細痕跡の観察	△	△	◎

ックアップし、型取りの際には解離剤としてパラロイド5%溶液⁽²⁾を塗布した。シリコンはブルーミックスソフトを使用し、レプリカ採取後はアセトンによる洗浄をおこなった。レプリカの作成後IDをふり、原資料と照合出来るよう記録をとった。なお、レプリカ法は適応する土器を選ぶため、状況に応じて拓本と使い分けることが望ましい(表11)。

レプリカ法と拓本の比較 ここでは、従来、報告書で敷物圧痕の情報を提示するために一般的に用いられてきた拓本と比較し、その有用性について検討してみたい。レプリカ法を実施するにあたっては、敷物圧痕が明瞭に観察されるか、敷物圧痕の可能性があるが底部自体の肉眼観察によっては判別が出来ないもののうち、表面の焼成が良好で、剥離やはなはだしい摩耗がみられないものを選別した。今回は圧痕の可能性があるが、拓本では検出できないもの15点に対してレプリカ法をおこなった。最終的にレプリカ法によって敷物圧痕が検出できたのは9点である。以下に、代表的なものを掲げ、レプリカ法と拓本の効果を比較する(図161)。

[図158-5] (図161上) 素材の断面形状はタテ・ヨコともに扁平で材の幅は4mm程度である。底部自体の観察でタテ材・ヨコ材が同様の材で構成された(2, 2, 1)の網代編みであることがみてとれる。拓本・レプリカともに同様の所見を得られる。一部の圧痕は底部外縁部まで達しているため、現在は一部圧痕がみられない部分があるものの、当初は底部外面全体に圧痕があったことがわかる。

[図158-6] (図161中, 図162上) 素材の断面形状は扁平なヨコ材である。2mm程度と細い。タテ材は一部でしか確認できないが、同様に細い材である。一部規則的にならぶヨコ材の痕跡により敷物圧痕があると判断できるが、その後の調整などによる痕跡と敷物圧痕の識別は、底部自体や拓本では困難である。レプリカをみると、タテ材はほとんど確認できないものの、ヨコ材の痕跡が4方向に残っているのがわかる(図162上)。ヨコ材の方向性は不規則で、少なくとも一度、敷物の方向を変えて土器が置き直される再圧がされていると想定される。

[図158-7] (図161下, 図162下) 素材の断面形状はタテ・ヨコともに2~3mm程度の

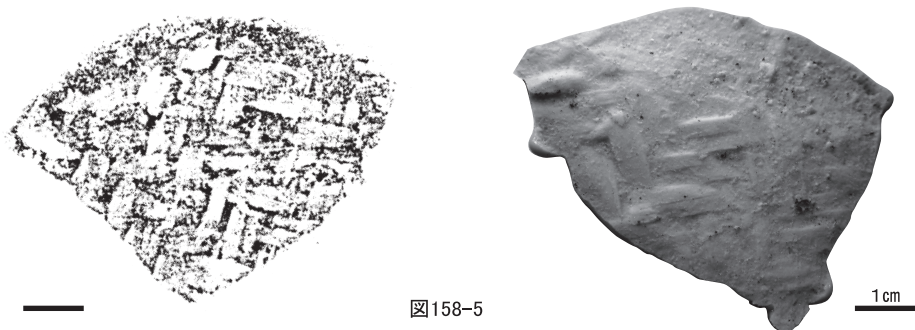


図158-5

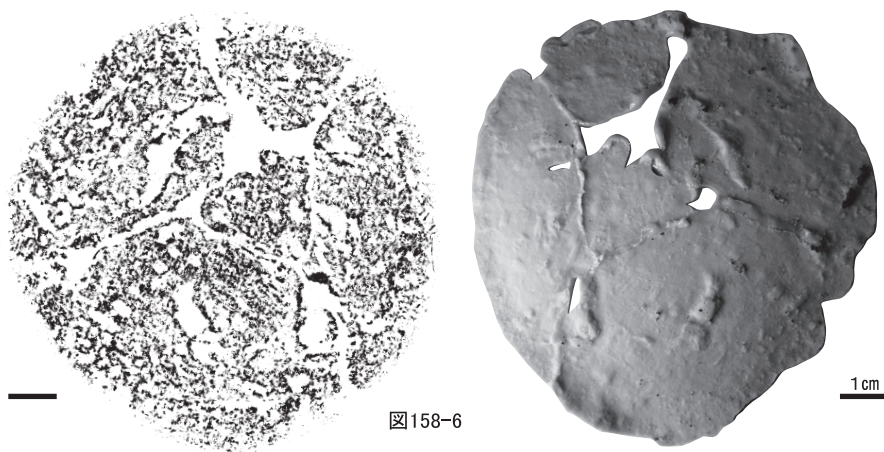


図158-6

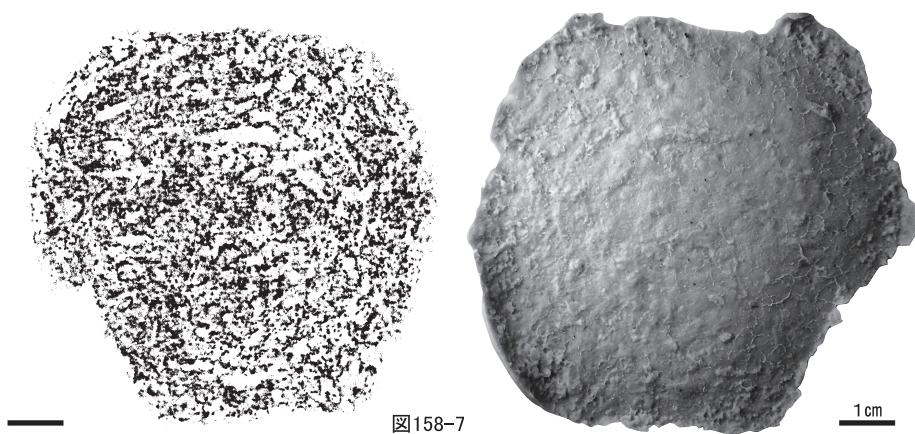


図158-7

図161 レプリカと拓本の比較（縮尺不同）

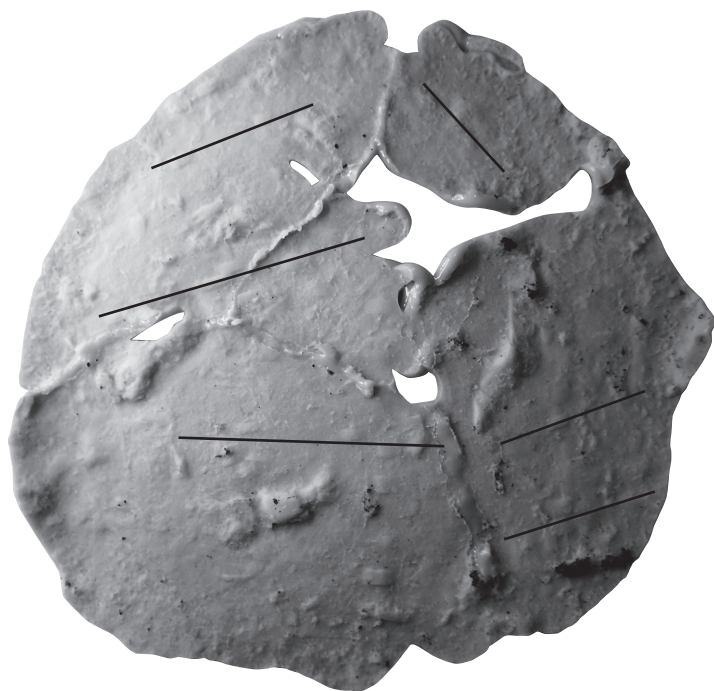


図 158-6 レプリカ拡大
実線はヨコ材の方向



図 158-7 個体7レプリカ拡大
タテ・ヨコ同材のため左下では両方を記載

図162 レプリカによる微細痕跡の確認

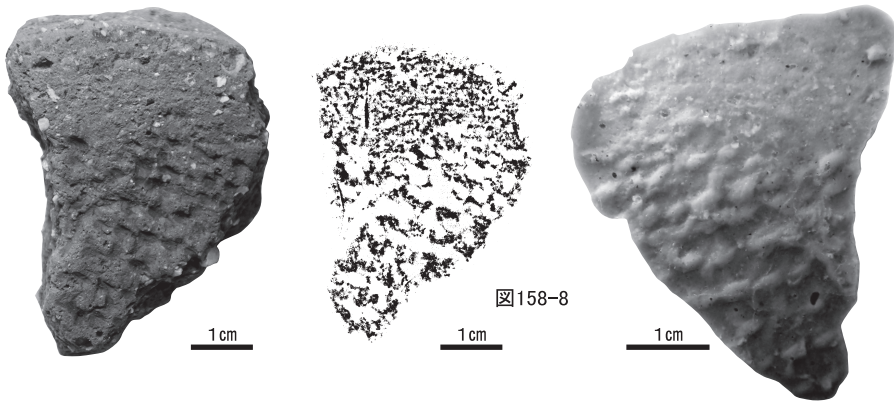


図158-8

図163 レプリカ法による観察に適した技法の例（縮尺不同）



図158-8

図164 レプリカによる原体の観察

細く偏平な材。底部自体の観察からも底部全体に細い材による敷物圧痕がみてとれるが、タテ・ヨコの関係が判別しづらい。ごく薄い圧痕のためか拓本ではほとんど素材や技法についての情報が増えない。図162に示したレプリカをみると、タテ・ヨコともに同様の薄く偏平な原体による敷物圧痕であるとわかる。また、圧痕も底部外面全体に残る。右上のみに方向の違うヨコ材の痕跡があり、再圧されている。

〔図158-8〕（図163・164） タテ・

ヨコともに素材の断面形状が丸。密なも

じり編み。底部外面の観察と拓本からは、原体である編組製品のヨコ材⁽³⁾の進行方向ははっきりと確認できるものの、ヨコ材が突出するためタテ材およびヨコ材の形状や方向ははっきりと確認するのは難しい。図164に示したレプリカをみると、タテ材が左上方向にある中心から放射状にのびていることがみてとれる。また、タテ材が放射状にあることを認識すれば、右上にもヨコ材の痕跡が残っていることがわかる。底部外縁部側に同心円の中心がくるような円形状の編組製品か、かご形の編組製品の体部の一部が敷物として転用されたものが原体である。土器底部に比べて、原体である編組製品のほうが大きい。

分析の結果

以上の観察結果から、明瞭ではないが敷物圧痕を含む可能性がある底部資料を調査する際に、以下の点については拓本よりもレプリカ法がより認識しやすいと言える。

- ・ もじり編みのタテ材方向
- ・ 断面形状が偏平でない原体の編組技法
- ・ 底部外縁部に近い部分に1～2個連続してのこるヨコ材の痕跡
- ・ 細く偏平な材が原体のときの圧痕の重複や方向を変えての再圧

逆に、5・9のように原体が偏平で圧痕の重複も特にみられないような場合は、技法の観察ならば拓本でも十分な情報が得られるため、重ねてレプリカ法を実施する必要はない。土器表面の状態が摩耗しておりレプリカ法に耐え得ない場合も避けるべきである。

4 分析の結果

形態と底径の関係 83点のうち、底径が復元可能なもの73点について形態別に底径の値をみると、平底は50～128mm、凹底は50～120mm、高台底は89～125mm以上となる。点数は少ないが凹底・高台底についても底径の値にばらつきがみられる（図165）。

底部形態と敷物圧痕・底径の相関 京都大学植物園遺跡では、ごくわずかでも敷物圧痕が認められたのは15点である。そのうち13点は平底で、丸底・凹底にも各1点ずつ敷物圧痕がみられた。そのすべてが編組製品を原体とする。底部全面に明瞭に敷物圧痕が残るものは5点で、残り10点はすり消されたりしてわずかに一部の組織の痕跡を残すのみである。また、平底と凹底について敷物圧痕の有無別に底径の分布をみると、圧痕のあるものの底径の最小値は62mm、ないものは50mmで、とくに底径が120mmを超えるものについては

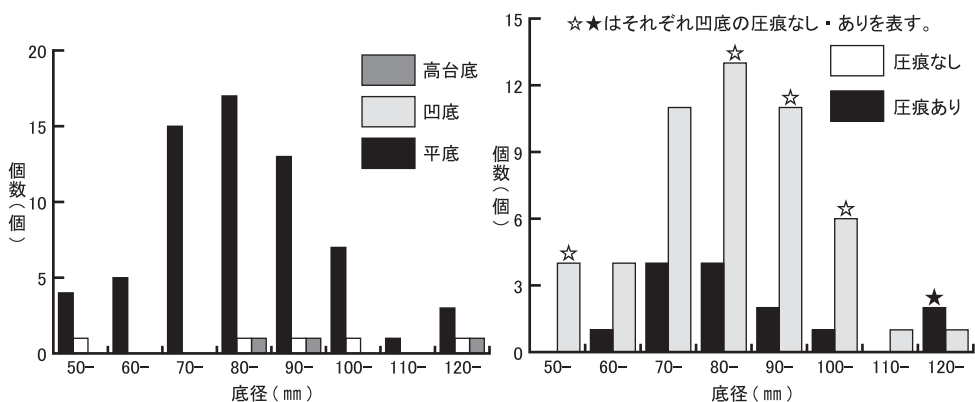


図165 形態別の底径分布 (n=73)

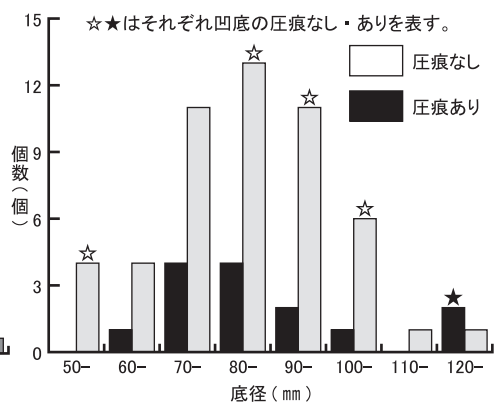


図166 圧痕の有無と底径分布

圧痕のあるものがないものの個数を上回った（図166）。平底のうち底部外面の状態が確認できる65点中の15点（23.0％）に敷物圧痕がみられた。点数が少ないため参考程度だが、丸底は3点中1点、凹底は4点中1点に敷物圧痕がみられた。形態としては平底が卓越するなかで、丸底・凹底にも高い割合で敷物底が含まれていると言える。

敷物圧痕の種類 敷物圧痕の原体はすべて編組製品であり、木葉痕はみられなかった。このうち編組技法まで確認できるものは7点で、その内訳は（2，2，1）の網代編みが4点、横添え巻き付け編みが1点、詳細不明の網代編みが2点である。網代編みはタテ・ヨコが同様の材のものは素材幅3～4mm程度が3点、1～2mm程度が1点である。圧痕の重複が確認できたものはすべて素材が幅1～2mmと細い。

以上をまとめると、京都大学植物園遺跡で複数個みられる圧痕の種類は

A類（2，2，1）でタテ・ヨコ材が同様の幅をもち、材が偏平なもの

B類（1，1，1）でタテ材は丸みを帯びているもの

の2種である。このうちA類は全国的に非常に一般的にみられる編組技法・素材形態であり、またとくに西日本では（2，2，1）を基本的な網代編みとし、（2，1，1）を東日本の基本的な網代編みとする我孫子昭二の仮説を支持する地域的な圧痕研究も多くみられる〔我孫子1971，松永2004〕。また、京都大学植物園遺跡ではA類3点とA類の可能性が高い1点（個体番号5）を合わせた4点のうち2点までが胴部最下部まで条痕を施すもので、これは北陸の影響を受けた布勢式の底部にみられる特徴である。B類は「東北型網代圧痕」と呼ばれるもので、縄文時代の東北地方から北陸地方に広くみられる〔植松1981〕。他に目立つものとしてヨコ添え巻き付け編みの圧痕1点がある。

敷物圧痕からみた土器の製作工程 京都大学植物園遺跡の敷物圧痕15点のうち、その後の調整（ナデもしくはケズリ）によって圧痕が一部失われているのは7点である。圧痕のナデ消しには

①圧痕が底部外面全面につき、底部外周部を回転ナデ等によって消す

②全体をナデ等によって消し、一部のみ圧痕が残る

の2つのタイプがあり、①は圧痕A類と組あう例が多い。

また、圧痕が重複する3点についてみると、圧痕A類は1点もなく、B類には2点ある。京都大学植物園遺跡においては、圧痕A類は意図的なナデ消しというよりも、土器の製作過程で胴部最下部の調整をする際に同時にナデ消されてしまったことが想定され、圧痕B類がつく場合は土器が完全に乾くまで敷物を密着させておかず、むしろ敷物の上で土器の

向きを変えながら土器をつくっていく，というありかたが想定される。京都大学植物園遺跡において圧痕A類が北陸との関連を示唆する条痕調整と組み合わせることを考慮すると，土器製作の方法の差が圧痕の種類や胴部の調整とリンクする可能性がある。

5 考察—底部からみた京都大学植物園遺跡出土の縄文土器—

底径と形態 本調査区の底部では，

表12 形態別の底径分布 (n=73)

後期中葉に西日本で広くみられるような，規格性が高く底径の小さな凹底はみられない。丸底3点 (3.6%)，平底72点 (86.7%)，凹底5点 (6.0%)，高台底3点 (3.6%) と，平底が主体を占め器種も深鉢が主体である。同じ比叡山西南麓の縄文後

	植物園	一乗寺向畑町北部地区
計測個数	65	26
平均値	84.9	75.5
中央値	86	74.5
最小値	50	48
最大値	128	120
標準偏差の推定値	16.5	19.6

期中葉（一乗寺K式）の一乗寺向畑町遺跡北部地区の底部の平底と比較すると，底径の値の中央値・平均値はともに大きく，値のばらつきは小さい（表12）。筆者は以前，比叡山西南麓においては，北白川上層式に後続する一乗寺K式の土器底部は，凹底の比率を増やしつつ底径は縮小傾向にあり，また底径の値のばらつきも減ることから，底部の規格化がみられると論じた〔西原・妹尾2014〕が，平底のみを取り出して一乗寺向畑町遺跡北部地区と京都大学植物園遺跡を比べると，平底のみでは一乗寺K式に先行する北白川上層式の底部がより規格性をもっている。一乗寺K式期以降においては，凹底のA1類として前述の論文で取り上げた瀬戸内地域に特徴的な底部形態が比叡山西南麓に登場し，依然として平底が主体を占めるものの，凹底が大きな存在感をしめすようになる。

本調査区の深鉢形土器で唯一胴部から口縁部が一体として観察できる埋設土器はすべて平底で，中央部が遺存しておらず確認できないものを除くと底部外面は胴部下部と同様にナデ消されている。点数が少なく一概には言えないが，埋設土器とするものは平底で敷物圧痕がみられず，土器製作の際に敷物を使用したとしても痕跡を調整によって消すという形が守られている可能性がある。これらは京都大学植物園遺跡の土器の主体をしめる土器の特徴である。土器製作技術は底部形態に反映され，しかも文様や口縁部の形態などの上部構造の変化を鋭敏には反映しないとされている〔幸泉2001・2002・2009〕が，京都大学植物園遺跡と近接する一乗寺向畑町遺跡北部地区の底部を比べると，全体として明瞭な差が現れた。口縁部や胴部ばかりでなく，底部もまた，型式学的な時間幅での変化を反映し

ていると考えるほうが自然なのかもしれない。

敷物圧痕 縄文時代を通じて敷物圧痕の種類による地域性を検討した松永篤知によれば、(2, 2, 1)や(1, 1, 1)の網代や木葉痕⁽⁴⁾は全国的に縄文時代中期・後期に圧痕として広くみられる。中期から後期前半の日本海沿岸以外の近畿地方内陸部では全体に敷物圧痕が残る土器底部資料自体が少なく、わずかにみられる場合でも(2, 2, 1)のいわゆる「西日本型」の網代編とごく少数の木葉痕という組み合わせが多い〔松永2004〕。本調査区では木葉痕はみられない。

敷物圧痕の分析からは、全国的にみられる圧痕A類のうち半数が日本海沿岸部の布勢式の特徴を併せてもっていること、いわゆる「東北型網代圧痕」の圧痕B類の存在と、圧痕資料があるものについては隣接する北陸・日本海沿岸部の影響が感じられる。また、レプリカ法をもちいて微細な敷物圧痕をひろっていくと、敷物圧痕が確認できた15点のうち6点(40%)を占める土器底部において圧痕がナデ消しなどの調整工程を受けてなくなっていることがわかった。圧痕A類はナデ消されていたとしても一部であることや、北陸地方の土器底部には高い割合で底部圧痕が明瞭に残存し、しばしばもじり編みやヨコ添え巻き付け編みがみられることを考えると、明瞭に残る圧痕は単に土器製作具である敷物の痕跡が「残った」ものではなく、ある種の装飾や文様として、製作具として使用する際に剥がれない方法で使用することも含めて土器底部に押圧されていると考えるべきである。

また、圧痕の重複が確認できたのは圧痕B類に限られる。植物園出土底部では、敷物原体の技法からみた分類によって土器製作の工程の違いも抽出出来る可能性が示唆された。

敷物圧痕と器面の調整は中期・後期を通じて平底にはかなりの割合で敷物圧痕がみられる北陸地方と、中期・後期を通じて敷物圧痕がほとんどみられない瀬戸内地方の中間的様相を示している。圧痕の重複からみた土器製作技術の違いがその二つを示しているとする、京都大学植物園遺跡で出土した土器底部は二つの技術製作伝統をもつ人たちによって製作・使用されたか、どちらかが搬入品である可能性が考えられる。現在はそれ以上に考えをすすめる材料がないが、今後の課題としたい。

おわりに

土器底部の敷物圧痕研究には膨大な蓄積があるが、現在、日本海沿岸部を除いた近畿地方の縄文時代では、底部圧痕は実際よりも少ないと認識されており、報告書にもほとんど分析項目として取り上げられることがない状態である。こうした微細な圧痕の分析を含め、

おわりに

土器研究の一角に土器底部を対象とする研究がより増えていけば、従来の認識より高い割合で、敷物圧痕を含む底部圧痕が存在することが判明すると予想している。

編組製品の研究においても、琵琶湖沿岸地域と日本海の間の地域はほとんど空白地帯であり、その間隙を土器底部圧痕の資料増加によって埋めることが出来ないかという発想が今回の微細な敷物圧痕へのレプリカ法の適用という作業へと繋がった。

さらに、レプリカを採取しても技法までたどり着けないような「痕跡」からも、重複圧痕のすり消しという要素と組み合わせることで、敷物の原体のタイプと土器製作技法が密接に関係していることを明らかにした。

またこうした底部外面の圧痕の観察においては、拓本と写真という従来からの手法に加え、近年取り入れられつつあるレプリカ法を用いることで、明瞭な敷物圧痕が得にくい近畿地方の土器についても詳細な観察が出来ることを示した。こうした手法を取り入れることで、これらの地域でも底部圧痕の報告が増加することを期待したい。

底部の形態・外面調整・敷物圧痕などの分析からは、従来口縁部・胴部に対しておこなわれてきたような型式学的検討は難しいと考えられてきた。この時期の深鉢の胴部下部は無文のものが多く、底部の器面調整からその上部の様子を推測するのは難しいが、形態・底径・敷物圧痕という要素からの分析を加えることで底部からも多くの情報が得られるのである。

京都盆地比叡山西南麓という限られた地域のなかでも口縁部・胴部に対する型式学的検討が蓄積されてきた中で、いま一度底部に対してそれらとのつながりの中で分析をおこなえば、いずれ底部の諸要素も含めた型式学的検討が可能になるのではないだろうか。

〔注〕

- (1) シリコンゴムを利用したレプリカ・セム法は当初、丑野毅氏らによって土器に残る種子圧痕を検出し、顕微鏡下での観察を可能にする簡便な方法として提示され〔丑野・田川1991〕、比佐陽一郎氏と片多雅樹氏による手順の紹介以来〔比佐・片多2006〕、栽培・農耕の起源を議論するための確実な証拠を提供する方法の一つとして東アジア地域先史時代や日本では縄文・弥生時代の時に広く応用されている。近年では種子圧痕のみならず虫や敷物圧痕などにも応用され、成果を上げている〔真邊2013・2014など〕。
- (2) 主剤：パラロイドB72、溶剤：アセトン。ここで用いたシリコンレプリカ法は、比佐・片多2006の方法に準拠した。また、実際の手順については真邊彩氏にご教示頂いた。
- (3) 編組製品を製作する際に、動かないタテ材に対して巻き付けたり絡めたりして編み進めていく材のこと。
- (4) 松永2004は、「葉脈圧痕」と呼称する。

〔参考文献〕

- 秋田かな子 1990年 「土器底部の輪積み技法—底面の圧痕の観察より—」『東海大学校地内遺跡調査団報告』東海大学校地内遺跡調査団, pp.150-165
- 秋田かな子 2007年 「土器の外底面圧痕と製作技術—圧痕の磨消・重複への着眼ともし上げ行為—」『縄文時代の考古学』同成社, pp.63-71.
- 我孫子昭二 1971年 『平尾遺跡調査報告 I』平尾遺跡調査会
- 阿部芳郎 1994年 「後期Ⅳ群土器の製作技術と機能」『津島岡大遺跡4—第5次調査—』岡山大学構内遺跡発掘調査報告7, 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター, pp.291-311
- 荒木ヨシ 1968年 「縄文式時代の網代編み」『物質文化』12, 物質文化研究会, pp.20-26.
- 荒木ヨシ 1970年 「東日本縄文時代後・晩期の網代編みについて」『物質文化』15, 同上, pp.12-18
- 荒木ヨシ 1971年 「縄文時代の網代編み」『物質文化』17, 同上, pp.29-41
- 泉 拓良 1977年 「京都大学植物園遺跡」『佛教芸術』115, 佛教芸術学会, pp.10-18.
- 植松なおみ 1981年 「東北型網代圧痕について」『古代文化』第33巻3号, 古代学協会, pp.17-26.
- 上羽明美 1975年 「底部圧痕」『桑飼下遺跡発掘調査報告書』平安博物館, pp.121-128.
- 丑野毅・田川裕美 1991年 「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』24, 日本文化財科学会, pp.13-36
- 幸泉満夫 2001年 「西日本後期縄文土器組成論—瀬戸内地方における沈線文系土器に関する研究」『考古学研究』第48巻3号, 考古学研究会, pp.85-105.
- 幸泉満夫 2002年 「縄文時代後期土器の非視覚的領域」『論集 徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会, pp.233-244
- 杉山寿栄男 1927年 「石器時代の木製品と編物」『人類学雑誌』第42巻8号, pp.315-322
- 中村徹也 1974年 『京都大学理学部ノートバイオトロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要: 京大植物園内縄文遺跡』
- 西原和代・妹尾裕介 2014年 「土器底部の変遷と地域間の関係」『一乗寺向畑町遺跡出土 縄文時代資料』考察編, 京都大学大学院文学研究科考古学研究室, pp.78-80
- 比佐陽一郎・片多雅樹 2006年 「土器圧痕レプリカ法による転写作業の手引き」『福岡市埋蔵文化財センター年報』25, 福岡市埋蔵文化財センター, pp.16-21
- 松永篤知 2004年 「東アジア土器の「敷物圧痕分類」について」『金沢大学考古学紀要』27, pp.99-108.
- 松永篤知 2008年 「縄文土器底部の「敷物圧痕」について」『考古学雑誌』第92巻2号, 日本考古学会, pp.105-152
- 松永篤知 2015年 「東アジア先史時代の編物」『金沢大学考古学紀要』36, pp.15-35.
- 真邊 彩 2013年 「レプリカ法による土器製作具の復元—素材形状からみた南九州地方の編物底—」『地域政策科学研究』10, 鹿児島大学大学院人文社会科学科学研究科地域政策科学専攻, pp.141-170
- 真邊 彩 2014年 「下宅部遺跡における縄文土器の敷物圧痕分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』187, 歴史民俗博物館振興会, pp.297-322
- モース・E・S, (矢田部良吉訳) 1897年 『大森介壺古物編』東京大学法理文学部

底部観察表

表13 底部観察表

番号	底部 径	底部 形態	立ち上がり 角度	器形	底部の調整	胴部最下部の 調整	底部中心 厚み	底部器壁 付近の厚み	再圧の 有無	備考
1	-	丸	-	浅鉢	敷物圧痕?+ナデ	ナデ	11	7		
2	74	丸	-	鉢	-	ケズリ	12	8		概報IV-34
3		平	90	-	敷物圧痕	-	7	-		
4	62	平	-	深鉢	敷物圧痕	細密条痕	-	12		
5	86	平	70→50	鉢	敷物圧痕	条痕	7	13		概IV-36
6	89	平	70	深鉢	敷物圧痕	斜+横ナデ	12	16	+	
7	74	平	45	浅鉢?	敷物圧痕	横ナデ	12	13	+	
8	76	平	70	-	敷物圧痕	ナデ	13	21		
9	101	平	110→70	深鉢	敷物圧痕	斜ナデ	5	13		
10	70	平	60	深鉢	敷物圧痕+ナデ	横ナデ	10	14		
11	88	平	70	深鉢	敷物圧痕+ナデ	横ナデ	8	13		
12	128	平	75	深鉢	敷物圧痕	横ナデ	13	-		
13	122	平	100→70	深鉢	敷物圧痕+ケズリ	横+縦ナデ	-	19		
14	93	平	75→50	深鉢	敷物圧痕?+ナデ	斜+横ナデ	12	15		
15	108	平	130→50	鉢	-	横ナデ	11	15		
16	60	平	80	-	-	縦ナデ	-	11		
17	-	平	-	深鉢	-	-	-	-		
18	52	平	-	-	-	横ナデ	-	11		
19	63	平?	-	-	-	横ナデ	-	8		
20	85	平	70→55	深鉢		ナデ	9	18		
21	106	平	55	-	-	横ナデ	10	16		
22	115	平	60	深鉢	-	横ナデ	10	17		
23	88	平	60	深鉢	-	横ナデ	9	15		
24	90	平	70	深鉢	-	ナデ	8	14		
25	82	平	65	深鉢	ナデ	横ナデ	-	14		
26	101	平	60	-	-	横ナデ	6	12		
27	94	平	60	深鉢	-	横ナデ	7	13		
28	75	平	60	深鉢	-	-	-	11		
29	100	平?	-	深鉢	-	縦+横ナデ	-	13		
30	68	平	65	深鉢	-	-	14	20		
31	82	平	-	深鉢	-	横ナデ	-	-		
32	80	平	70	深鉢	-	横ナデ	6	10		
33	86	平	70	深鉢	周辺部回転ナデ	斜ナデ	10	12		
34	96	平	70	深鉢	-	-	8	8		
35	86	平	60	深鉢	-	横ナデ	8	11		
36	94	平	70	-	-	横ナデ	7	15		
37		平	50	深鉢	-	ケズリ	-	14		
38	90	平	45	鉢	-	縄文	5	11		
39	75	平	60	深鉢	-	斜ナデ	-	13		
40	76	平	100→80	深鉢	-	横ナデ	-	18		
41	50	平	-	-	ナデ	ナデ	9	-		
42	72	平	65	深鉢	-	横ナデ	-	-		

表13 つづき

番号	底部 径	底部 形態	立ち上がり 角度	器形	底部の調整	胴部最下部の 調整	底部中心 厚み	底部器壁 付近の厚み	再圧の 有無	備考
43	92	平	90→60	深鉢	—	斜+横ナデ	8	16		概IV-35
44	86	平	100→50	鉢	—	横ナデ	6	13		
45	107	平	90→65	深鉢	—	横ナデ	8	18		
46	93	平	110→60	鉢	—	横ナデ	12	18		
47	84	平	100→60	—	—	斜+横ナデ	—	17		
48	120	平	90→60	鉢	—	横ナデ	—	20		
49	80	平	70→45	深鉢	—	斜ナデ	8	18		
50	98	平	100→70	深鉢	ナデ	縄文	16	24		
51	89	平	90→60	深鉢	—	ケズリ+横ナデ	6	16		
52	—	平		深鉢						
53	89	平	70	深鉢	—	斜+横ナデ	8	15		
54	78	平	90→65	深鉢	—	縦+横ナデ	—	15		
55	102	平	—	—	ナデ	—	11	—		
56	99	平	—	—	ナデ	ナデ	12	16		
57	72	平	—	—	ケズリ	—	—	—		
58	78	平	70	—	敷物圧痕+ナデ	斜+横ナデ	12	14		
59	90	平	50	深鉢	—	横ナデ	—	13		
60	76	平	90→60	深鉢	—	縦+横ナデ	11	21		
61	87	平	70	深鉢	敷物圧痕?	横ナデ	—	13		
62	92	平	—	—	ナデ+周辺部回転ナデ	—	—	—		
63	76	平	70	深鉢	—	横ナデ	12	20		
64	77	平	110→50	深鉢	—	横ナデ	9	—		
65	82	平	60	深鉢	回転ナデ	横ナデ	—	14		
66	78	平	55	—	ナデ?	横ナデ	—	17		
67	56	平	50	鉢	ナデ	横ナデ	11	15		
68	50	平	50→20	浅鉢	ナデ	ナデ	10	11		概IV-38
69	104	凹	—	—	—	—	—	18		概IV-33
70	87	凹	—	深鉢	—	縦+横ナデ	—	16		
71	50	凹	50	浅鉢?	ナデ	ナデ	7	9		
72	120	凹	60	深鉢	敷物圧痕	横ナデ	5	14		
73	98	凹	80	深鉢	ナデ	横ナデ	13	17		概IV-37
74	125+	高台	—	—	ナデ	—	21	—		
75	97	高台	—	—	ナデ	—	—	—		
76	89	高台	70→50	—	—	縦+横ナデ	11	—		
—	—	丸	—	—	—	ケズリ	—	—		
—	72	平	100→65	深鉢	—	横ナデ	12	18		
—	—	平	—	—	ケズリ?	—	9	—		
—	92	平	90→60	深鉢	—	ナデ	9	20		
—	60	平	45→50	—	—	—	—	—		
—	—	平	70→60	深鉢	—	横ナデ	—	—		
—	—	平	—	深鉢	—	—	10	—		